

あとがき

私解：松澤宥のしごと—自筆年譜に沿って—  
佐谷和彦

当画廊恒例のオマージュ瀧口修造展は今年で15回目を迎える。今回は松澤宥(1922—)である。観念芸術の第一人者として、松澤宥の名前は、内外の関係者の間では、つとに高い。松澤宥は瀧口修造を敬愛し、一方、瀧口修造は殆んど美術評論家が松澤宥に注目していない頃からいち早く松澤を評価していた人物である。「美術界では、すくなくとも唯一素晴らしい関係であった」と松澤宥は二人の関係について述べている。(対談「プサイの函の中で」松澤宥・菊畑茂久馬、機関13・1982)

今回の展示作品は新作のブラックボックス4点、“緋と白”10巻およびオブジェ「世界改造に関するプサイ本の周辺」1963年作の3組のほか、旧作数点を別室に展示している。

また、この展覧会を記念し、松澤宥のレシタティブ・パフォーマンス(1458字の数霊術的レシタティブ)を初日の7月3日午後6時22分、当画廊でとり行うことになっている。岡崎球子さんとともに私もこのパフォーマンスに立ち会うことになっている。

展覧会のカタログには、松澤宥「松澤宥の最終予想にむけて」、イルムトラウト・シャルシュミット=リヒター「松澤宥について」、千葉成夫「極北をもとめる心」をご寄稿いただいた。また瀧口修造の「松澤宥に招かれて」を再録した。英訳はスタンリー・アンダソン氏にお願いした。さらに、岡崎球子さん(岡崎球子画廊)からこの展覧会開催に関し、種々ご協力いただいた。記して厚く御礼申し上げます。

この松澤宥展に際し、私は松澤宥の自筆年譜(前出、機関13)を繰り返し読み、大変興味深く、得るところが多かった。特に1922年の出

生から「オブジェを消せ」：観念芸術の誕生 1964年までの言動の記録が面白かった。そこには松澤宥の人間像、しごとのなりたちがみえてくるのである。以下、自筆年譜に沿って特徴的な諸点について述べる。

1. 数霊術的オブセッションと真言密教

1922年2月2日午前2時に松澤宥は生まれ、出生後22日間、目を開けなかった。この22・2・2・2・2および22という偶然の数字に作家は数霊術的なオブセッションを強く感じている。22日間の暗黒の瞑想の時間は、「眼に見えるものよりも目に見えないものを希求するという私の生涯を決定づけた根本原因であった」と自筆年譜の冒頭に松澤宥自身が述べている。

この展覧会の案内状(量子芸術超公案2)(カタログの冒頭参照)も2が二つ置かれているし、レシタティブ・パフォーマンスの時間も午後6時22分、と指定してある。2または22という数字は松澤宥にとって霊的な特別の意味を持ち、それは生涯を貫いているのだ。

松澤宥の「宥」は真言宗の僧侶の名前に使われるものであると言う。この真言密教の思想が松澤宥の芸術のなかで生きていることは松澤宥のしごとをみていると分かる。例えば9という数字に対する特別の執着がある。金剛界マンダラ(曼陀羅 mandala—mandaは“心髄”、“本質”を、laは“得る”を意味する—)の基本型は次のとおりで、9分割の図形で示される。その読み方は向上門と向下門の二分類に分けられる。

向上門

5	4	3
6	9	2
7	8	1

向下門

5	6	7
4	1	8
3	2	9

松澤宥のしごとには、このマンダラ9分割の図形がよく現れる。この展覧会の案内状、パフォーマンス〈1458字の数霊術的レシタティブ〉のチラシもこの図形が使用されている。

自筆年譜によると金剛界曼陀羅の九会(9分割)の図形を初めて使った作品は〈プサイの意味—ハイゼンベルク宇宙方程式によせて〉1960年、第12回読売アンデパンダン展出品作である。プサイについては後述する。

つまり、この2と9。この数字のもつオブセッションと真言密教は松澤宥を解く鍵である。

## 2. 定住地下諏訪と夜間高校の数学教師

松澤宥は出生地の下諏訪から離れたことがなく、恐らく一生涯、この地に住むであろうと推測される。何故、下諏訪か？思うにこの土地が冬は凍結する諏訪湖のほとりにあり、山に近く、歴史的にも由緒ある土地柄であって、清澄な空間で住みやすいということであろう。

第二に松澤総本家の跡取り息子であったことも何らかの離れがたい気持ちがあったのであろう。

第三にこの地は東京から適当な距離に位置し、過剰な情報を選別、濾過するのに最適であったからであろう。

その下諏訪に所在する長野県立諏訪実業高等学校定時制下諏訪分校で、松澤宥は1949年から33年間数学の教師として勤務したのである。夜学であるから、昼は自分のしごとをするのに十分な時間があるというメリットがあった。それにしても33年間の長きにわたり一度も転校することなくこの学校に止まることができたのは珍しいことである。校長の理解もさることながら、そこには何よりも松澤宥の強い意志を感じるのである。

松澤宥先生は普通の数学の教師ではない。絵画、建築、詩に造詣が深く、フルブライト交換留学生として2年間アメリカに留学された

英語のベテランである。考えてみると、このような先生に習うというのはまことにぜい沢な話で、何ともうらやましい生徒たちであるな、と私は思う。

その松澤先生が、授業でときどき「お化け」の話をするのが好きでしてね、と言われたのには驚いた。真面目な顔で「お化け」の話をされる松澤先生の様子と生徒たちの反応を想像すると、失礼ながら思わずおかしさがこみあげてくるのである。

ところでこの数学は松澤宥を理解するためのひとつの鍵である。後年、1988年「量子芸術」を創り出されるが、これは量子力学の量子の概念と似ているのである。量子力学の理解は高度な数学の理解が前提であることは明らかである。松澤宥の世界には数学のもつウエイトは高いのである。

## 3. フルブライト交換留学による渡米

松澤宥は1954年(32才)、フルブライト交換留学試験に合格した。フルブライトとはアメリカ上院議員の名前である。第2次大戦終了後、アメリカは自国と諸外国との相互理解を深めるため、大学院学生、専門家、教育者の交流計画を立案した。その法案(1946年成立)を議会に提出したのが、このJ・W・フルブライト議員で、その名に因んでFulbright Programと呼ばれたのである。日・米間では1952年から実施され、この計画により留学した日本の留学生は4,601名(1952-83)に達したと言う。当初はとにかく超難関の試験として有名で、フルブライト交換留学生は当時の超エリートであった。

この試験を受けるため松澤宥は1年間、英語に浸り切った。1日平均10時間、英語の読み、書き、会話(リングフォン)に明け暮れた、と言う。その集中力には感嘆する。

では一体、何故、受験したのか？それは留学先のウイスコンシン州立大学(スペリオル湖

畔の大学町スベリオル)での研究テーマが“美の客観的科学的測定法”であったことに示されている。

試験を受ける2年ほど前、マサチューセッツ工科大学のゲオルギー・ケペッシュ教授は、当時の美術雑誌に建築原論を発表した。それに触発された松澤宥は、教授に作品の写真を添え手紙を出した。それが発端である。ケペッシュ教授からアメリカに来て勉強してはどうか、との手紙を受けとったのがひとつの大きな留学の動機であった、と松澤先生は言われる。したがって研究テーマは、建築の場合のモジュールの考え方、基本となる寸法などを科学的に追求し、美を計量しよう、とするものである。これは一応の留学志願目的のテーマであった。ここで松澤宥が早稲田大学理工学部建築学科の卒業であったことが想起される。

さて、1958年8月に出発し、ウイスコンシン州立大学に1年、ついで59年9月からニューヨークのコロンビア大学で大学院に籍を置き現代美術と宗教哲学の研究をすることになる。

ニューヨークでの実際の毎日の生活は、美術館、画廊、図書館、本屋を歩き廻るのが日課で、特に近代美術館の斜め前の図書館に入りびたりであった、と言う。そこで、美術史に新たに付け加えるべきものは何か?と秘かにアイデアを練っていたのである。特に行為を含んだもの、すなわち、ハプニングス、イヴェント、パフォーマンスそしてヴァニシングス(消滅事)等に興味を持った、と年譜には記されている。このことは後年の松澤宥のしごとに深いかわりをもつもので興味深い。

1957年2月2日午前2時(数霊術的2の連続に注意しよう)、眠れないまま枕元の小型ラジオを廻していると不思議な放送が入って来た。それはニュージャージー州のWOR局の深夜番組で、死後再生、物体浮遊、心霊現象等の超心理学、超科学、超宗教的な異常事象につ

いて、異常体験者、占星術家、霊媒、数学者、催眠術家、ヨガ哲学者、生理学者、医学者、技師、学者などが招かれて話す放送であった。ニューヨークを発つまでの一ヶ月の間、松澤宥は毎夜、この深夜放送を熱心に聞いたのである。この放送を聞け。これはひとつの啓示であった。これが触媒となって、後年の「絵画の非物質化」への道が開かれることとなる。この体験の意味は松澤宥のしごとを考えるうえで重要である。

帰途、ボストンでG・ケペッシュ教授を訪ね、1957年4月1日帰国する。興味深いのは、当時フルブライト留学の実績があれば、当人にその気があればの話であるが、社会的に評価が高いとされる職業、地位に転ずることも十分可能であったであろう、と俗人の私などは思うのである。しかし、松澤宥は全く動ずることなく、恬淡としてわが道を歩む。脱世俗というか超世俗というか、ここに松澤宥の真骨頂をみる。真言密教の行者とみまごうばかりの人物像が浮かび上がってくる。私にはとても真似ができないと思う。

#### 4. $\Psi$ ・プサイの意味—消滅、心、宇宙

$\Psi$ プサイとは何か?  $\Psi$ はギリシャ語24文字のうち、最後の $\Omega$ オメガのひとつ前の文字である。最後即消滅の一つ手前の文字である。そして、サイコロジーPsychologyのPsyで、心を意味する。

また、原子物理学者のハイゼンベルクの宇宙方程式には $\Psi$ プサイという文字が5、6個入っている。そのためか、物理学者も宇宙を表現するときには、 $\Psi$ プサイという記号を使っている。したがって $\Psi$ プサイは宇宙という意味も含んでいると考えられる。

渡米前(1952年)すでに、パラサイコロジー(超心理学)について有名なデューク大学超心理研究所に関心を持っており、その関係でプ

サイという言葉は当然作家の頭のなかにあったのである。

実際にプサイという言葉を使った作品が生れるのは渡米後一年たった1958年の「プサイの世界」と題するペインティングである。

爾来、Ψプサイは観念芸術成立1964年以降も随時現れ、松澤宥のシンボルマーク的な意味を持つようになっていく。今回の案内状にもΨは4個使われていることからもうかがえる。

## 5. 瀧口修造との出会いと「プサイの部屋」

瀧口修造著「ミロ」1940年アトリエ社刊は世界で初めてのミロに関する単行本として関係者には知られているが、この赤い表紙の「ミロ」を学生時代(恐らくは早稲田高等学院時代1941-2年頃)に読んだと松澤先生は言われる。

では松澤宥が瀧口修造に初めて会ったのは何時か? それは1953年である。その年の美術文化協会展のために作成した松澤宥のポスターを瀧口修造が誉めた。それを知った松澤宥はそのポスターを持って瀧口修造を訪ねたのである。それが最初の両者の出会いである。

それ以降、フルブライト交換留学に際しては、推薦人として瀧口修造が登場する。また読売アンデパンダン展(1958-63)に出品のプサイ・シリーズの出品作について、瀧口修造の好意的な評価が重なる。1961年の東京国立近代美術館〈現代美術の実験展〉には瀧口修造の推薦で「プサイの祭壇」を出品することとなる。

1963年8月13日、瀧口修造は青木外司氏(青木画廊)の案内で松澤宥の屋敷を訪ね、一泊した。これは一つの事件である。瀧口修造は「プサイの座敷」に案内しようとする松澤宥に対し、「いや、またこの次の機会に」と言って、入らなかった。どうしてか? これは永遠の謎である。

青木画廊で開催された「プサイによる松澤宥展」1963年9月9日-21日、の展覧会カタログ

に瀧口修造は「松澤宥に招かれて」と題してテキストを書いておられる。(前掲参照)その最初の部分を示す。

……諏訪湖畔のかれの現実の座敷に招かれ、そこで深い眠りをむさぼるに及んで、どこからともなくプサイの鳥が羽ばたきながら現れ、翼が私の肉体にかすかにふれるのをすら感じたのである。もろもろの欲念と仏性(仮称)との無限のコンビネーションのくもの巣のなかで、かの鳥(無数の唯だ一羽)が水面すれすれのところを飛ぶのを見たと思うのは、ついに人間のあさはかな錯覚であるにしても、なんと心爽やかなものではなからうか。……

実は、先日(5月30日)、私は女房とともに下諏訪の松澤家を訪問、松澤先生の案内で「プサイの部屋」を見る機会を得た。

二階への階段を上ったところで、右側の穴からすると胎内に入るように「プサイの部屋」に入った。そういう不思議な仕掛けになっているのである。時刻は午後3時頃で、小さな天窗から光が差し込み明るい。しかし夜であれば、雰囲気はガラリと変わるであろう。きっとここに住む物の怪どもが一斉に立ち上がるであろう。これは見ものであろう。部屋にはさまざまなものが、床に壁に満ちている。雑然としているが、しかし無秩序の秩序という感じで、納まるべきところに、ものは納まっている。長い時間によって飼育された絵画、コラージュ、道具類、紙、布、木、石、金属等が置かれている。なるほどΨの部屋は時間を感じさせる。消滅する前の長い時間を感じさせる。プサイの鳥は飛んでいなかったが、ねずみがいた。標本箱のなかに繭に包まれて、ねずみの高貴な骨格がねむっていた。これはドキッとするほどの美しさで私は思わず声を上げた。その傍らに、無造作に投げかけられたように伸びている色褪せた赤

い布が妙な気分を誘う。こんな土着的なおいのなかで、アメリカ留学中に画かれたパステルが妙に明るく私の眼を射た。写真でみるよりやはりこのプサイの座敷の実物はすごい……

瀧口修造と松澤宥の友情は、1979年7月1日、瀧口修造が亡くなるまで続き、そしていまなお、松澤宥は瀧口修造に話しかけているのだ。

## 6. 「オブジェを消せ」—— 観念芸術の誕生

1964年6月1日の深夜、裏座敷に寝ていた松澤宥は「オブジェを消せ」という声を聞いた。松澤宥はその声を、文章だけで美術を表現せよ、という天の啓示と受け止めた。三日三晩、考えに考えた末、6月4日にそう決めたのである。観念芸術の誕生である。

元来、美術は目でみるものである。そしてかたちと色彩で成立している。それを消してしまうのであるから美術は観念すなわち脳の世界だけのものとなる。それは従来の美術の概念を超えた世界である。美術作品はその作家の精神、観念の表現である。と同時にその作品は物質的なもので構成され支えられている。視覚という感覚によって美術は存在しているのに、ここではそれを否定している。観念芸術ないし概念芸術は、芸術を「芸術という観念ないし概念」まで極限化することによって生まれた、とされる。芸術についてそれにまつわるものを次から次にはぎとり、消すべきところはすべて消した結果、極限的、究極的なものとして人間の観念が残る。そこから発信されたものが松澤宥の観念芸術なのだ。

概念芸術コンセプチュアル・アートの創始者はJ・コース(Josheph Kosuth)とされ、1965年がその出発点とされる。松澤宥の観念芸術は1964年がはじまりであるから一年早い。1979年、ローマのアカデミア・ティベリーナは松

澤宥を観念芸術の創始者として認め、その永久会員に推挙していることを記しておきたい。松澤宥の業績は、国内よりもむしろ欧米においてその評価は高いのである。

## 7. 量子芸術の世界

量子芸術は1988年5月、ベルリンのベベルカ画廊(Wewerka Galerie)での展覧会(ベルリン—東京 現代美術交流展:主催朝日新聞社)の発表が最初で、同年9月、岡崎球子画廊「量子芸術宣言」展が開催されている。

量子芸術については松澤宥著「量子芸術宣言」1992年2月22日、岡崎球子画廊発行を読むのが一番である。

その冒頭にはこの芸術のコンセプトが示されている。すなわち

- 1) この芸術は量子力学の量子の概念と近似の概念による芸術である。
- 2) この芸術は人間の感覚に直接訴えることは出来ない。直接見たり、触れたりすることは出来ない。
- 3) この芸術は人間の知力によってのみ、即ち判断、推理、観念合成などの思惟作用によってのみ認知、把握し得る。おお、尖鋭にむかう知力による特殊化である。
- 4) この芸術は遂に概念芸術の停滞を突破しはるかに進化させるべきものであり、N・チョムスキーの言う新しい人類の遺伝形質を獲得しはじめた稀な芸術家(科学者など)がその創出、推進をになう可能性をもつ芸術である。(以下省略)

さて、量子芸術は量子力学の量子の概念に近い、とある。そこでまず量子、量子力学とはいかなるものか?と私は手元の世界大百科事典(平凡社刊)を開き調べたが、とても私には歯が立たない。むつかしい数式が出てきてお手上げである。そこで広辞苑(岩波書店刊)を引くと下記のように簡潔に記されている。そ

の方が分からないけれどもボンヤリと分かったような気になる。

量子Quantum:不連続な値だけを持つ物理量の最小単位。……

量子力学:巨視的な物体について成り立つ古典力学に対し、電子、原子、分子、光子のような微視的な対象をも取り扱う力学。……

私は旧制高校の理科甲類を友人の助けを得て曲がりなりにも卒業した者であるが、力学(古典力学)の授業は特に苦痛であった。量子力学の理解など最初からあきらめている人間である。したがって私には量子芸術についてもボンヤリとした概念しか持てないのである。これからどの程度まで理解できるようになるか、楽しみである。松澤先生は今世紀中には量子芸術を完成させたい、と言っておられる。そのことを申し添えておきたい。

以上、松澤宥展を開催するに当り、私なりに松澤宥のしごとと人間像に迫った次第である。どうもまだ道は遙かに遠い感じはするが少なくとも以前よりは身近なものになった。私の不勉強を棚に上げ松澤先生にさまざまのことを無遠慮にお聞きしたにも拘わらず、丁寧にお答えいただき恐縮している。

最後に松澤先生にお礼を申し上げ、ますますの御健勝をお祈りするものである。ありがとうございました。

1995年6月9日